

平坂を超えて

和心

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小説家になろう、pixivなどにも掲載する、重複作品です。

日本の神話や民話、古典文学を題材にした物語を書いて行きます。

目次

平坂を超えて

1

鬼ではなかった

6

平坂を超えて

平坂を超えて

遙か昔。

国産みの神、イザナギは、妻であるイザナミの死を受け入れられず、黄泉に下り、亡き妻に会いに行った。

しかし、そこで目にした妻は、無残に腐り果てた骸となり、かつての美しい面影は何か一つ残つていなかった。

イザナギは漸く妻の死を悟り、激しく慟哭しながら、もと来た平坂を駆け登つて行つた。

この時、イザナギは二人の鬼に追われ続けた。

一人の鬼の名は虚無と言ひ、一人の鬼の名は絶望と言う。

虚無と絶望は、ひたすら駆け続けるイザナギに、絶えずこう囁き続けた。

「おまえは、これまで、多くの命を産み出し、育んみ、慈しんできた。だが、どんなに産み出し、育み、慈しんできて、やがて、おまえの妻のように死んで、腐り朽ち果ててゆく。」

「新たな命を産み出す事になんの意味があるだろうか。命を育み慈しむ事になんの意味があるだろうか。」

「そもそも、生きてる事に何の意味があるのだ？」

「さあ、おまえもこっちに来るが良い。こっちに来て、腐り朽ち果てるが良い。そうすれば、もう、慈しんだ者の死に嘆き悲しむ事はなくなる。」

「さあ、無駄に産み、無駄に育み、無駄に慈しむ事はやめるのだ。こっちに来て、亡き妻と共に腐り果ててゆくが良い。」

イザナギがどんなに振り払っても、駆けつけても、二人の鬼は何処までも何処までも追い続け、耳元近く囁きかける事をやめなかった。

イザナギは思った：

鬼達の言う通りだ：

もう、駆けるのをやめよう：

ここで立ち止まり、もう一度、妻のいる黄泉に行こう：

その時、忽然と辺りが白々と明るくなってきた。

長い闇夜が終わり、朝日が昇り始めたのである。

気づけば、平坂を超えて、目の前には美しい河が流れていた。

イザナギは、一晩泣き腫らして涙に濡れた顔を、河の水で洗い流した。

そして、ふと、顔を上げて見ると、日の照らす方角に、一人の幼い少女が立つて、見つめていた。

この子は何処から来たのだろうか？

この子はいつからいたのだろうか？

イザナギが首を傾げていると、少女はニツコリ笑つて、呼びかけてきた。

「お父様。」

と…

イザナギは、思わず少女を抱きしめた。

その温もりは、何とも暖かく、優しく、心地よく…

次第に胸いっぱい、愛しい気持ちがあふいていった。

イザナギは、思わず、少女に呼びかけた。

「おお、日御子よ…」と…

日御子と呼ばれた少女は、また、ニツコリ笑いかけ…

「お父様…」

と、イザナギの懷に顔を埋めた。

この時、イザナギは思い出した。

これまで、多くの命を産み出してきた時、育んで来た時、慈しんできた時、その一日

一日が喜びであった事を……

何より、その傍らには、常に愛しい妻の笑顔があり、目をつむれば、今も妻は優しく微笑みかけている。

「イザナミよ……」

イザナギは、平坂を振り返り、妻に語りかけた。

「私は、この子を育てよう。この子だけではなく、これから多くの命を新たに産み出し、育み、慈しもう。」

例え、いつかは腐り朽ち果てる定めにあろうとも……

一日に百の命が死ぬのなら、二百の命を産み出そう……

一日に千の命が失われるなら、二千の命を育もう……

そして、この世に一つでも命があるなら、その命が腐り朽ち果てるその日まで慈しもう。

何より……

私は今日も生きてゆこう……

あなたの分まで……」

すると……

何故か、何処からとなく見つめている妻が、あの時と同じ美しい笑顔で、笑いかけて

いるのが見えるような気がした。

鬼ではなかった

鬼ではなかった

平安時代。

アテルイ率いる蝦夷が、朝廷に謀反を起こした時の事です。

討伐に当たった、征夷大將軍・坂上田村麻呂率いる官軍は、長い間、一人の蝦夷の将に、苦戦を強いられていました。

この頃：

反乱を起こした蝦夷達といえ、都では誰もが、人を生きながらに食らう鬼だと噂され、恐れを抱くと共に、忌み嫌っておりましたが：

大地に目を向ければ、森の木々の上から襲撃を仕掛け、木々の上に気をとられれば、地虫のごとく、地面から這い出て、夥しい官軍を殺傷し続けた、この蝦夷の将は、身の丈五尺もあり、頭には、一尺はあろう水牛の角を生やし、鰐の様な顎には、狼のような鋭い牙を生やして、毎日すすり上げる人間の生き血が、乾いた事が無い大鬼だ：

などと言う話が、まことしやかに語られていました。

そんな噂話は、戦が長引くと共に、更に尾ひれがついて、この大鬼は、一日千人の官

軍兵士や、関東の和人達が、生きながらに四肢を引き裂かれて、もだえ苦しむの眺めながら、その肉を食らい、生き血をすすめるのを楽しんでるなどと言う話となり：

最初のうちこそ、その噂話に憎しみをあおられて、戦意を高めていた官軍兵士達も、次第に、この大鬼率いる蝦夷に、憎しみよりも恐怖が勝るようになり、次第にしり込みして、都に帰りたいがるようになりました。

これはまずい！

坂上田村麻呂は、そう思いました。

このまま、噂が更に大きく拡大して広まれば、戦そのものを続けられなくなる。

そうなれば、官軍は、戦わずして、反乱軍に敗れてしまう。

そう、考えたのです。

そこで、坂上田村麻呂は、一旦、アテルイの謀反そのものはおいておいて、大鬼率いる蝦夷軍を滅ぼす事に、全力を注ぐ事にいたしました。

それから、更に、官軍の苦戦は続きました。

けれども：

もともと、蝦夷軍より、数では、相当勝っている官軍です。

その官軍が、全ての兵力を、一つの軍勢に傾ければ、いかに、大鬼率いる蝦夷軍が強くとも、勝てるものではありません。

少し…

また、少しと、次第に、蝦夷軍が、追い詰められてゆきました。

そして、ついに、ある川のほとりで、大鬼も討ち取られ、彼が率いる蝦夷軍も全滅しました。

長らく官軍を苦しめ続けてきた、蝦夷軍に勝利した夜のこと…

まだ、この反乱の総大将である、アテルイとの大戦が控えているものの、東の間の勝利に酔いしれ、官軍兵達は、盛大な宴を催しました。

その宴の最中…

坂上田村麻呂の前に、その大鬼の首が引き据えられてきました。

人を、生きながらに八つ裂きにして食らう大鬼です。

どんなにか、邪悪で、残忍で、獰猛な、醜い鬼の首であるのだろう…

坂上田村麻呂は、恐怖心と共に、何処か、好奇心のようなものも抱き、その首を目の前で見ると、今か今かと待ち焦がれていました。

ところが…

「(ト)…(ト)それは…」

坂上田村麻呂は、目の前に引き据えられた首を見て、愕然としました。

それは、まるで、乙女のように美しい、まだ十五になるかならずの少年の首だったか

らです。

「鬼では…なかったのか…」

坂上田村麻呂は、その首を両手にとって、まじまじと眺めながらつぶやきました。

「人だったのだな…」

思えば…

坂上田村麻呂は、ふと、今までの戦を振り返って、思いました。

都では、蝦夷達は鬼だと聞かされてきたけれども、これまで屠った蝦夷の兵で、一人として、都で聞かされた鬼などいませんでした。

みな、自分達と同じ肌の色をし、同じ顔かたちをし、太刀できれば、同じ赤い血が流れていたのです。

「和人も、蝦夷も、同じ人であったのだな…」

周囲では、まだ、宴が続く、官軍の兵士達は、束の間の勝利に浮かれ騒いでいます。けれども…

いつまでも、掲げ持つ蝦夷の少年の首を見つめる、坂上田村麻呂一人だけは、その胸の奥底に寂寥の風が吹き抜け、何か空しい思いを抱き続けたのでした。